

A Case of Online International Exchange Program at Elementary Schools: Educational Practice in Foreign Language and Integrated Study Classes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-10-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: HONJO, Megumi, NORITOMI, Satoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00067158

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



オンライン国際交流の可能性

—小学校外国語科と総合的な学習の時間における教育実践—

A Case of Online International Exchange Program at Elementary Schools: Educational Practice in Foreign Language and Integrated Study Classes

本所 恵*・乗富智子**

HONJO Megumi, NORITOMI Satoko

1. はじめに

グローバル化の進展に伴って小学校でも英語教育が強化され、2020年度からは中学年に「外国語活動」が、高学年に教科「外国語科」が導入された。中学年で「聞くこと」「話すこと」に慣れ、高学年で「読むこと」「書くこと」も加わり、小学校段階で外国語による実際のコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが重視されている。

英語学習において、実際に英語でコミュニケーションをとる機会は重要である。金沢大学学校教育学類附属小学校（以下、附属小）では、ALT や大学への留学生などと交流する機会を積極的に設けている。ただし交流相手は大人であることが多く、同年代の子供と英語で交流する機会はほとんどない。実際に行き来しての交流はハードルが高いが、コロナ禍でオンライン授業が進んで一人一台端末の利用にも慣れてきた折、それを活用してオンラインでの国際交流学習に挑戦することになった。

学校教育における ICT 機器の活用状況について、小学校では 2019 年時点で「教師がデジタル教材等を活用」することは 99%以上の学校で行われており、児童自身が ICT を操作する活動も 4 割程度あった。しかしながら、「遠隔地の児童生徒等と英語で話をして交流する活動」は 3.0%にとどまっていた（文部科学省、2020）。

GIGA スクール構想で一人一台端末の整備が進み、ICT 活用が量的にも質的にも拡大していることから、これから遠隔地との交流は進むと考えられる。このような状況において、オンラインでの国際交流教育実践における試行錯誤の記録や分析は、今後の国内外との交流学习の発展に役立つだろう。

本稿では、附属小 6 年 2 組の児童と、インドネシアの第 2 の都市スラバヤにあるインターナショナル・スクールの 6 年生の児童とで、2021 年度に実施した国際交流学習を検討する。この実践の計画から実施のプロセス、子供たちの学習の様子を明らかにし、オンライン国際交流学習の成果と課題について考えたい。

2. 実践の背景

(1) 小学校での国際交流実践

小学生の国際交流学習は、2002 年度に総合的な学習の時間が導入されたことや、2011 年度から小学校高学年で外国語活動が必修化されたことを機に注目され、いくつかの実践が報告されている。

山本（2011）は、日本の小学生がインドやオーストラリアの子供たちと英語の手紙や Eメールの交換を 2 往復行い、英語学習に対する内発的動機づけが高まったことを明らかにしている。この実践は、聞く・話すことが中心だった当時

の小学校での英語学習に、手紙の読み・書きを導入する挑戦でもあった。

井上・山本(2014)は、オーストリアの子供たちとの交流を通して、日本の小学生が英語を使う楽しさを感じ、英語学習への意欲を増したことを報告している。この交流は、大人が渡欧する際に、小学生が作成したビデオと手紙を持参し、現地の小学生に渡して手紙の返信を書いてもらうとともに現地の様子を撮影する形で行われている。子供同士の交流は1往復にとどまるが、海外の友達を意識してビデオや手紙を作ったり、メッセージをもらったりすることを通して、自分の思いを伝えるための英語を学ぶ意欲が高まったことが示されている。

近年のICT環境や英語教育の進展を反映して、木村他(2020)は、タブレット端末を活用して少人数グループ同士で交流を繰り返す実践を行なっている。この交流は、英語を学ぶ日本の小学生が英語で話し、日本語を学ぶオーストラリアの子供たちが日本語を話す言語交換の交流である。各グループ1回あたり10分の交流を1ヶ月間に3回繰り返し、交流の間にお互いの文化について調べて質問の準備をする。交流の度に実施したアンケート調査から、この学習が計画通り「コミュニケーションスキル」、「情報活用能力」、深い異文化理解につながる「交流に対する情意や意欲」や「学びに向かう力」を育んだことを明らかにしている。

以上のように、交流学習は学習意欲を向上させると報告されており、通信環境や相手の状況などに応じた交流の方法が工夫されてきた。

本交流学習の直接的なきっかけになったのは、2020年度に信州大学教育学部附属長野小学校(以下、長野小)とスウェーデンの基礎学校の子供たちが実施した交流学習だった。日本とスウェーデンの小学生が、それぞれの国の教員志望学生の支援を得ながら4人程度のグループで英語のビデオメッセージを制作し、月に一回送り合った。そして学年末にオンラインでのリアルタイム・ミーティングを実施し、ゲームや交

流活動を行なった(林, 2021)。このプロジェクトは、金沢大学と信州大学とスウェーデンにあるウプサラ大学という3大学の教育学部・大学院のコンソーシアムによる教員養成分野での国際交流の一環であった。そのため報告会が金沢でも行われ、類似のオンライン国際交流学習を実施する可能性が検討された。

(2) 長野小とのオンライン交流授業

オンラインでの国際交流学習を実施するにあたって、気掛かりな点は主に2点あった。ICTを使った遠隔交流であるという点と、英語を使った交流であるという点である。

そのためまずは、英語ではなく日本語でICTを使った遠隔交流を試すことになった。長野小6年1組と附属小6年1組をオンラインでつないで2021年3月に実施し、長野小の子供たちがスウェーデンとの交流プロジェクトについて紹介するとともに、お互いの地域や学校を紹介しあった。

1時間の交流ではあったが、子供たちはそれぞれ熱心に話し、聞き、質問をし、楽しく交流して他県にある学校の様子を学んでいた。

この交流学習で手応えを感じ、翌2021年度の6年生を対象として、国際交流学習を具体的に計画し始めた。当初はスウェーデンの小学校との交流を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実現できなかった。そこで、知人を通して相談に応じてくれた、インドネシアのインターナショナル・スクールと交流を行うことになった。

3. カリキュラム

国際交流学習は、総合的な学習の時間と、外国語科の学習とを関連づけて実施した。本節では、附属小でのそれぞれの時間のカリキュラムにおける国際交流学習の位置付けについて整理する。

(1) 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間は年間70時間ある。そのうち35時間は学年で共通の学習、残り35時

間は学級裁量の時間として設定している。学級裁量の時間は、学級担任がそれぞれカリキュラムを組み、教育実践を行う。

6年生では、1学期には主に学年共通でキャリアに関する学習を行った。2学期は主に各学級で学習を行い、6年2組は「インドネシアとの国際交流」をテーマとした。

(2) 外国語科

国際交流の使用言語が英語であったため、交流のビデオメッセージ等で必要となる英語表現（言語材料や文構造）の学習を外国語科の学習と関連づけて指導した。

附属小では、1年生から英語活動を行っており、本交流の対象児童は5年生の時から外国語科の学習を年間70時間行っている。この70時間のうち35時間、すなわち毎週1時間は、ALTと学級担任、あるいはALTと英語担当教師である乗富によるチームティーチング授業である。なお、この授業は通常45分だが、本実践を実施した時期には、新型コロナウイルス感染症対策で時差登校を行っていたため40分授業だった。残り35時間は、学級担任によるモジュール授業であり、週3回毎回15分の学習である。ただし、本交流実践を実施した6年2組は乗富が学級担任であったため、すべての授業を乗富が担当した。

授業で使用している教科書は三省堂のCROWN Jr: 6である。この教科書では、各学期の学習が3段階で構成されており、学びの見通しを立てるHOP、語彙や表現を増やすSTEP、実際の場面で表現するJUMPに分かれている。毎学期の最終課題にあたるJUMPには、子供が自分で話す内容を考えてプレゼンテーションを行う言語活動が設定されている。このJUMPの活動と、交流学習のビデオメッセージの内容を関連させた。

4. 国際交流学習の概要

(1) 参加児童

国際交流学習には、附属小6年2組の児童全

員(36人)と、スラバヤにあるGrowing Kid Schoolの6年生全員(15人)が参加した。各校の児童はそれぞれ5グループをつくり、グループをペアリングし、ペアのグループに宛ててビデオメッセージを送りあった。

ビデオでは英語が用いられた。金沢の児童は1年生の頃から英語活動や英語学習を行っており、昨年度からは年間70時間の授業を受けている。一方、スラバヤの児童は、インターナショナル・スクールにおいてすべての授業を英語で受けており、英語の使用に困難はない様子だった。スラバヤの児童にとって英語の使用は珍しくはないが、本国際交流学習は異文化交流の機会として非常に肯定的に受け止められた。

なお、国際交流学習を実施した2021年7月から2022年1月の間、Growing Kid Schoolでは新型コロナウイルス感染症対策のためオンライン授業を行っていた。そのため、スラバヤからのビデオメッセージは、児童が各家庭で撮影した動画を教師が編集していた。また、オンライン交流会には、児童が各家庭から参加していた。

(2) 計画

国際交流学習を計画するために、筆者たちは2021年6月22日にスラバヤの教員たちとオンライン・ミーティングを行った。両国の大学教員は以前からの知り合いであったものの、小学校の教員同士はオンラインで初めて顔を合わせた。しかしながらミーティングは非常にうちとけた雰囲気が進み、双方にとって無理なく期待の持てる交流学習を計画することができた。

計画としては、前述した長野小の国際交流学習を参考にして、ビデオメッセージを毎月1本送り合い、2往復した後にオンラインでのリアルタイム交流会を設けることとした。つまり、ビデオメッセージは、まず7月に金沢からスラバヤに送り、9月にスラバヤから金沢に返信し、11月には再度金沢からスラバヤに送り、12月にスラバヤから金沢に再び返信する計画とした。実際には、日本から2022年1月に3回目のビ

デオメッセージを送り、図1のようなプロセスになった。

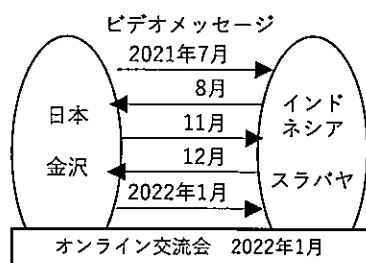


図1 交流学習のプロセス

インドネシアと日本の時差は2時間で、子供同士がオンラインでリアルタイムに複数回交流することも可能と思われた。しかしながら、交流の事前準備を十分に行って英語や異文化理解の学習を行いたいと考えた点や、児童にとって新しい友達と英語で会話することは、突然では難しそうといった事情を鑑みて、ビデオメッセージでの交流をメインとした。

作成するビデオの内容として、1回目の往復は子供たちの自己紹介と学校の様子の紹介、2回目の往復は学校行事やそれぞれの国の行事などの紹介と設定した。

最後に行うオンラインでのリアルタイム交流会については、ビデオでの交流の様子を見て、テーマや進め方を改めて相談することにした。実際には、2022年1月12日に教員間で再度オンライン・ミーティングを行なった。両国の教員間のミーティングはこの2回のみであったが、実践途中では、携帯のメッセージアプリのグループチャット機能を用いて教師間の連絡や相談を適宜行なった。細かな確認がすぐにできて便利だったことに加えて、ビデオを受け取った子供たちの様子を確認し合えたことが、指導にも学習にも安心感をもたらした。

5. 交流学習のプロセス

(1) 導入

4月中旬に、6年生の総合的な学習の時間の

1年間の予定を児童に伝えた。1学期にキャリアに関する学習を行い、2学期には国際交流を通じた学習を行うことである。この段階では国際交流の相手は決まっていなかったが、子供たちは、どの国であれ同世代の海外の小学生と交流することに非常に前向きだった。

6月下旬に、国際交流の相手がインドネシアの小学生に決定した。これを児童に伝え、交流方法として、ビデオメッセージの交換を2回行い、最後にはオンラインで顔を合わせてリアルタイムで交流するという計画を示し、プロジェクト全体の見通しをもたせた。

ビデオメッセージを作成し交流するグループ分けは、教員が行った。考慮した点は、グループ間で子供たちの英語力に大きな差が出ないようにすることと、子供たちのリーダーシップ、コミュニケーション力、交友関係などである。子供たちからは異論なく、そのグループでビデオメッセージの内容を相談し、作成を開始した。

(2) 第1回ビデオメッセージの作成・送付

1回目のビデオメッセージでは、子供たちが自己紹介と学校紹介を行った。ビデオ作成には総合的な学習の時間を6時間ほど使った。

まず、グループで学校紹介の内容を英語で考えた。この内容は1学期の外国語科の最終課題を応用した。小学校の新任の先生に附属小を英語で紹介するという課題である。

しかし、この転用時に予想外の出来事が起こった。最終課題では、相手や目的に合わせて伝える事柄を整理することが重要な学習内容の一つだった。そのため児童は、多くの情報の中から自分が一番伝えたい事柄を選び取り、既習表現を使って学校を紹介していた。しかしながら、その内容をインドネシアの小学生に紹介する際には、伝えたいことを日本語の文章で書き直し、iPadの機械翻訳で英訳しようとした。相手が日本人ではなくインドネシアの小学生になった途端、英語の正確さにこだわってしまい、伝えたい事柄の整理・形成や、既習の表現の使用など、外国語科での学習を活用できなかったのである。

そこで、伝えたいことがたくさんあるという児童の意欲の高さを認めた上で、機械翻訳に頼っている英語を用いてコミュニケーションする力が見つからないこと、目的に合わせて伝える事柄を考える練習が大切であることをくり返し指導した。その結果、多くの児童は自分で考えて学習した表現を使おうとしたが、一方で、機械翻訳から抜け出せず、学習した表現をほとんど使わずに翻訳で出てきた英文をそのまま利用した児童もいた。

文章が決まった後、iPadを使ってビデオメッセージの撮影と編集を行った。ビデオ撮影の方法は全員が知っていたが、編集は初めてだった。iPadに搭載されている動画編集アプリ iMovieに動画を取り込む方法だけを指導し、その他はアプリを自由に試す時間を1時間とって自由に色々な操作を行わせた。子供たちは字幕をつけたりBGMをつけたりする方法を見つけては教え合い、学んだ技を活かして工夫を凝らしてビデオを編集した。作成途中で各グループのビデオを鑑賞し合うことで、字幕やBGMなどの工夫を相互に取り入れてビデオを改善させていた。

完成したビデオはそれぞれ1分半～4分程度で、一人ひとりの児童の自己紹介の他、校舎や校庭の様子、習字や音楽、教室での授業風景、お弁当での昼ごはんの様子などの紹介が入っていた(写真1)。藤棚の下でクラスごとに協力して朗読劇をする附属小の伝統行事「ふじだなおとぎ会」を紹介するグループもあった。

すべてのグループのビデオメッセージが完成した1学期末に、ビデオメッセージをまとめてインドネシアに送った。



写真1 習字の紹介(ビデオメッセージより)

(3) 第1回返信ビデオの受け取り

9月に返信ビデオが金沢に届いた。ビデオは、ペアになったグループの友達を念頭において作成されてはいるものの、ビデオの内容はグループによって様々であり、各ビデオは1分～5分程度の短いものだったため、すべてのビデオをクラス全員で鑑賞した。すべてのビデオを見ることでスラバヤの子供たちの様子をよりよく理解できた。

スラバヤからのビデオメッセージは、Growing Kid Schoolのロゴが入ったカラフルな背景に、児童が各自の自宅で撮影した動画や、ナレーション付きの写真が埋め込まれていた。子供たちは制服を着ており、流暢な英語で自分の趣味などを話した。自己紹介動画の他、学校の様子を紹介する写真や、インドネシアの島々やビーチの紹介、祝日や宗教の紹介、インドネシア語の紹介などがあり、英語ナレーションにBGMがついていた。

ナレーションには、一部は字幕がついていたが字幕のない部分も多く、話すスピードが速くて聞き取りが難しい箇所もあった。附属小の児童は、インドネシアの小学生の英語力の高さに驚きつつ、動画サイトの字幕機能を使ったり、再生速度を落としたり、分からない箇所を教師に聞きに来たりして、英語を聞き取り、理解しようとしていた。そして、異なる文化に刺激を受け、次のビデオメッセージ作成に向けてアイデアを膨らませていた。

(4) 第2回ビデオメッセージの作成・送付

2回目のビデオメッセージの内容は、それぞれのグループで自由に決定した。はじめは、多くの児童が日本の紹介をしようと考えていたが、インターネットを使って簡単に調べられる内容ではなく、自分たちにしか伝えられない内容を考えるように促した。その結果、子供たちは自分たちの学校生活や学校行事を取り上げた。例えば、学年ごとに遠くまで歩いてお弁当を食べたり遊んだりする「遠足」や、5・6年生が学校生活をより良くする活動を行う様々な「プロジ

ェクト活動」などである。

各グループは、コンセプトマップを作ってナレーションの内容を考えた(写真2)。1回目のビデオ作成時もコンセプトマップを使ってアイデアを出し合ったが、その時よりもコンセプトマップに具体的な内容を書き込むよう指導した。そうすることで、児童はコンセプトマップを使ってナレーションの役割分担を行い、ナレーションを話す際にコンセプトマップをそのままメモとして見つつ英語で話すことができた。

紙にナレーションの英語文を全部書いて読み上げるのではなく、キーワードが書かれたコンセプトマップを見ながら話せるように練習した。多少文法的な正確さに欠けても気にせず、英語を「読む」のではなく「話す」ことを目指した。

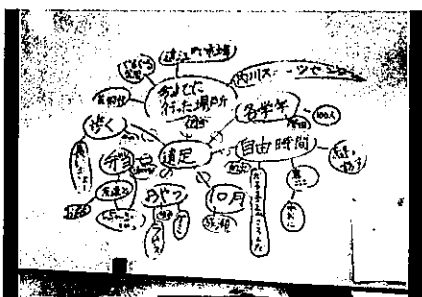


写真2 役割分担をしたコンセプトマップ



写真3 教室の様子と字幕



写真4 休み時間の様子と字幕

ビデオ作成には、前回と同じく6時間程度を用いた。紹介する授業の様子を撮影したり、過去の行事について写真を用いたり、説明のために図表を示したりするなど、1回目よりも充実した素材を集めていた。スラバヤからのビデオや他のグループのビデオを参考にして、動きのある動画を撮影し、BGMをつけたり長めのナレーションに字幕をつけたりすることに挑戦しており、編集技術が高度になっていた(写真3、写真4)。それでも、編集作業は前回よりスムーズに進んでいた。

ナレーションには、過去形や疑問形など、これまでに習った英語表現を積極的に取り入れていた。児童の強い希望があった場合には、授業で学習していない *could* や *must* といった助動詞を使う表現を教師が伝えた。

どのグループも、自分たちの紹介した内容に関連して、相手に質問する形でビデオをしめくくった。学校生活について紹介したグループが *How is your school life? Do you have any routine?* と相手に尋ね、遠足について紹介したグループが *Do you have a field trip this year?* と質問するといった具合である。1回目のビデオ作成では相手の顔を知らなかったが、今回は一度返信ビデオを受け取ったことで相手の顔や声をイメージできるので、一方通行で何かを紹介するのではなく、返信がある交流として意識しているようだった。

第2回のビデオメッセージは11月中旬にインドネシアに送付した。

(5) 大学生による交流学习サポート

この頃、交流学习の一環としてインドネシアの文化に関する学習を改めて行なった。総合的な学習の時間を使って、インドネシアの地理、宗教、言語、人口などをクイズ形式で学んだ。この授業を実施したのは、教員志望の大学生4人である。大学生は、最後のオンライン交流会でグループ別の交流をファシリテートする予定で、そのために交流学习の中盤から授業を見学したり、交流活動をサポートしたりした。

インドネシアに関する学習では、首都や国旗などの基本情報や、第1回の返信ビデオを見て児童が既に知っていたことも多く、学生が児童について理解する機会にもなった。この授業の後に、学生はそれぞれ担当するグループの児童と交流して第2回のビデオメッセージを確認した。

(6) 第2回返信ビデオの受け取り

12月25日に、スラバヤから2回目の返信ビデオが届いた。日本から送ったビデオメッセージの最後の質問に答えるように、様々な学校の行事や活動を取り上げて、写真や動画にナレーションをつけて紹介されていた。遠足で畑に行って採れた野菜で料理をした様子や、水耕栽培の学習、独立記念日の行事のほか、オランダやスコットランドへのバーチャル旅行学習の様子もあった。附属小の子供たちは、自分たちの学習とはずいぶん違う様子に刺激を受けていた。

子供たちが最も驚いていたのは、自分たちの行事ととても似ているものがスラバヤにもあったことだ。それは Camping と紹介された行事で、4年生と6年生が参加して近くの山や海に行くそうだ。グループで協力してテントを張り、様々な野外活動を行う。協調性やリーダーシップを養うことを目的としていて、日本の宿泊体験学習と多くの共通点があった。

英語に関しては、1回目のビデオよりもよく聞き取ることができていた。各ビデオの内容が焦点化されていて理解しやすかったことや、長いナレーションには丁寧に字幕がついていたこ

とも要因だが、子供たちは文章のすべてを聞き取れなくても、映像や聞きとれた単語から概要を捉える力が身につけてきているように思われた。

どのビデオも最後は See you later! で終わっていて、遠からずリアルタイムで話せることを楽しみにしている様子が伝わってきた。そしてそれを見て、附属小の子供たちも親近感を強め、交流会に期待を寄せていた。

(7) 第3回ビデオメッセージの作成・送付

計画ではお互いに2回のビデオ交換であったが、ちょうど2学期末の外国語科の課題を活用してビデオ作成ができそうだったため、3回目のビデオメッセージを作成・送付した。

今回のビデオの一番の特徴は、児童一人ひとりが個人でひとまとまりの内容をすべて伝えることだった。2回目までのビデオでは、グループで内容を考え、役割を分担して英語を話していた。しかし3回目は、各児童が自分の小学校生活で最高の思い出を伝えるため、内容も英語の文章もすべて一人で考えた。

この部分は、外国語科の学習と関連させている。2学期の外国語科では、「夏休みの思い出」「もの様子や特徴」「春と秋を比べて」といった単元を通して、一般動詞の過去時制、形容詞、be 動詞の過去時制を学習した。その上で、「最高の思い出は... (My best memory is...)」という単元でプレゼンテーション課題に取り組んだ。この単元では、自分の小学校生活をふり返り、一番の思い出を、これまでの学習を生かして英語で友達と伝え合った。

ビデオメッセージでは、友達と伝え合った思い出を転用し、絵や写真をみせながら一人ずつ自分の思い出を述べた。

グループでの動画作成の際は、大学生のサポートを受けながら、ビデオの始まりと終わり部分を工夫して撮影していた。グループで協力して身体で文字を表現したり、踊ったりして、様々な楽しい動画をつくっていた。

こうしてできた3回目のビデオを1月18日

に送付した。

(8) オンライン交流会

オンライン交流会は、2022年1月27日の日本時間13時半から、スラバヤでは11時半から、1時間で行った。

① 計画

前述したように1月12日に教員間でオンライン・ミーティングを行い、オンライン交流会の日時、進行、内容の詳細を決定した。

このミーティングには、金沢からは筆者らの他にサポートの大学生の代表者が参加し、スラバヤからは Growing Kid School の教員8名が参加した。教員間が国際交流できる場も少ないので、こういったミーティングでお互いの様子を知れたことは有意義だった。

② 準備

交流会の前に新型コロナウイルス感染症が拡大したため、現場で各グループのサポートに入るはずだった大学生が現場に訪問できず、オンラインでの参加になった。

交流会本番の1週間前に、大学生も交えて接続リハーサルを行った。附属小では普段 google classroom を使っており、zoom には慣れていなかったためである。zoom 専用アプリが児童の iPad にインストールされておらずブラウザから利用したため、手順が煩雑で予想以上に手間取った。なんとか全員がミーティングに参加した後、各グループのブレイクアウトルームに移動する手順や、自分の名前の表示の仕方などを練習し、簡単なゲームなどを行った。すべての児童が自分の端末からミーティングに参加するには想定よりも時間がかかったが、全員が接続から退出まで一連の手順を練習できた。

本番には、附属小の児童は各自の iPad を使って参加し、ホームルーム教室の他、学年共用のスペースや家庭室を使って接続した。物理的に離れた場所で活動するため、現場でサポートする大人の人数が減ったのは不安だったが、乗富の他教師2人のサポートを得た。

なお、スラバヤの児童は各家庭からの参加だ

った。

③ 交流会の様子

交流会では、まず15分ほどのオープニングを行い、30分ほどグループに分かれて交流会を行い、最後に10分ほど全体でのクロージングを行った。司会は、オープニングを乗富が、クロージングをスラバヤの教師が担当し、グループ別の交流会では大学生と教師たちが各グループに入って交流をサポートした。

オープニングでは、スラバヤの子供たちがインドネシアの歌を歌い、大学生が全員に向けてミニゲームをした。オンラインでの合唱は、微妙な音のずれが生じて合わなかったが、歌付きの動画を画面共有で流し、解説をしてくれたので雰囲気を楽しむことができた。ゲームは、当初グループに分かれて対抗戦を考えていたが、オンラインではグループ分けやルール説明に時間がかかるため、シンプルに全員で楽しむ連想ゲームにした。結果的には十分なアイスブレイクになった。

グループ別の交流は、ブレイクアウトルームを5つ設定して、ビデオメッセージを送り合った子供同士で交流をした。参加者が自分でルームを選択できるよう設定し、子供たちと大学生は自分のグループのルームに入り、教員はどのルームにも出入りできるようにした。

交流では、自己紹介をした後、好きな食べ物を紹介し合うことを共通テーマに設定しており、日本の子供たちはイラストを描いて、メモを作って準備をしていた。英語の文章を読むのではなく、話す要点と必要な英単語を記したメモを作成した(写真5)。

子供たちは照れて緊張した面持ちで言葉数少なくなっていたが、準備した話はすべて紹介し、相手が頷きや表情で理解を示してくれることに安心しているようだった。スラバヤの子供たちはとくに準備はなく、会話の中で紹介をしていた。クロージングでは、パソコンの画面でインドネシアの料理の写真を提示しながらの紹介もあった。子供同士の質問が出にくかったの

で、大学生と教員とが質問を投げかけたり、英語やそれぞれの言葉を少し交えて会話を進めたりしながら、和やかに交流が行われていた。

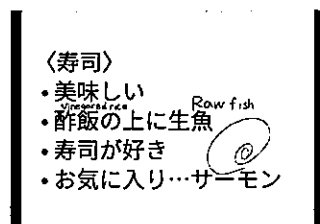


写真5 好きな食べ物を紹介するためのメモ

(9) 振り返り

オンライン交流会の後、子供たちは教室で振り返りを書き記した。以下のような感想がみられた。

- ・インドネシアから送られてきた動画は、早口だし難しい単語もあって何度も見直さないとわからなかったけど、声に出して読んでみたり、翻訳で調べたりして何となく理解できた。インドネシアのいろいろな文化をたくさん知れたので、嬉しかった。
- ・zoomの交流は、動画と違って何度も聴き直せないのが難しかった。でも、頑張って単語を聞き取ることができた。自分の寿司紹介も、聞き取りやすいように工夫できたのでよかった。授業の英語と違って早口だったけど、相手にちゃんと通じていたら嬉しい。難しかったけど、とても楽しかった。
- ・英語は諦めず、単語だけでも聞き取ろうとすることが大事だとわかった。これからはもっと英語を勉強して、すらすら話せるようになりたい。その時は、翻訳に頼らず、今までに習ったことを使って伝えようと思った。それは、zoomの交流で、少し英語の文章が間違っていたけど、通じたからです。もっとたくさんの人と話せるようになりたいと思った。
- ・インドネシアからくる動画が言うのがはやくてなかなか理解できなかった。でも、理解しようと思って聞くことを頑張った。インドネシ

アの人と繋がるだけでも楽しかった。まだまだ知らない英語がたくさんあって、勉強になった。

- ・zoom交流の時は、全部英語で話していて全然わかりませんでした。でも単語だけ知っているのはわかりました。インドネシアの人は英語に慣れている感じで(話すスピードが)とても速かったです。あきらめず、理解しようとして聞くと少しわかったこともあった。外国の人と話す機会が初めてだったので、貴重な体験でした。
- ・zoom交流をしてみて、英語は覚えるというより、話して覚えることが大切だと思った。自分の食べ物について話すときに、私は書いて覚えていました。でも、話してみるとすぐに頭に入りました。話して失敗して、もう一度考えて話すことを今後意識したいです。
- ・私は、今まで外国の人たちは遠い存在のように感じていたけど、ビデオ交流などを通して身近に感じることができました。インドネシアの人たちと交流することで、「英語の楽しさ」がより感じられました。zoom交流では、実際に話すことでよりインドネシアの人と仲良くなれたと思いました。
- ・相手の国について知れたし、自分達の国のことも知ってもらえることができたので、よかった。相手のビデオを見て、まあまあ内容がわかったので、よかった。zoomでは、トラブルがあったりしたけど、やっぱりその時に会話すると楽しかった。相手の気持ちがわかりやすいので、英語で話しやすかった。

どの児童も、はじめは英語の聞き取りが難しかったようだが、自分たちの英語が伝わった自信や楽しさを感じていた。外国のことを身近に感じ、国際交流や英語学習の意欲を増していた。

6. 考察

(1) 成果

今回の国際交流学習では、一人一台のICT端末環境を最大限に活用しながら、半年間にわた

ってゆっくりと交流を重ねることができた。動画の撮影や編集に加えて、資料やメモの作成・共有、各児童のナレーション練習など、多様な場面で iPad を利用した。児童は端末を毎日家庭に持ち帰っており、家庭で自分の話す英語を録画して練習する姿も見られた。

各自が端末を使って行う活動とともに、グループメンバーと協力して行う活動も多くあった。コンセプトマップを使ってビデオの内容を考え、練り上げ、決定する過程や、ナレーション作成、撮影・編集まで、役割を分担して協力しながら活動を行なった。同じメンバーと数回ビデオ作成を繰り返したことで、お互いの得意な点を活かして助け合い、チームワークや連帯感を育んでいた。

交流を重ねることで、子供たちはインドネシアの文化や歴史、学校の様子に関心を高めていた。インターネットや図書などで調べて得る情報だけではなく、実際に交流して直接伝えてもらうことによって身近に感じることができ、実感の伴った異文化理解となった。

使用言語が英語だったので、外国語科と関連させた学習ができ、英語学習の更なる意欲づけにもなった。3回のビデオ作成とオンライン交流会を通じて、文法的な正確さばかりに捉われず、機械での全文翻訳に頼るのではなく、相手とコミュニケーションを取るために要点を考えながら英語でメッセージを伝えられるようになった。相手からのビデオメッセージを理解する時も、すべての英語文を完全に聞き取るのではなく、映像の助けを借りながらキーワードを捉えて理解しようとしていた。

オンライン交流会では、日本の子供たちと同様にインドネシアの子供たちも緊張しており、教師とインドネシア語で話す姿がみられた。日本の子供たちにとっては、交流相手が同じ年齢の小学生であり、さらに、英語が流暢ではあるが母語ではなかったことで、自分たちも努力すればもっと英語を話せると思えたようだった。

(2) 課題

ビデオメッセージでの交流は、作成にも視聴にも子供たちに合わせて必要な時間をかけることができ、ICT 端末環境も整っていたので比較的スムーズに進んだ。強いて言えば、子供たちの活動場所がグループごとに離れてしまうことが多いので、今回の交流学习では後半のみだった大学生のサポートが、交流開始から通してあるとより心強いし、子供たちの動機づけにもつながったと思われる。

また、ビデオ編集については、グループの中で ICT 操作が得意な児童が引き受けることが多く、必ずしもすべての児童が行ったわけではなかったことは役割分担の課題点と言える。

オンライン交流会では、ハード面の課題があった。子供の端末のスペックの限界で、雑音が入ったり、音声が届かなくなったり、途中で落ちてしまったりした。とくに、zoom のメインルームからブレイクアウトルームへの移動ができずに接続が切れてしまった児童が数名いた。大学生のサポートがオンラインになったことで、子供たちに対して現場対応できる人数が予定より少なくなり、十分ではなかった。

交流計画について、今回はリアルタイムでの交流が一度きりだった。一回でも最後にオンライン交流会があり、それを念頭に置きながらビデオメッセージの往復を繰り返したことで、交流相手の文化などへの関心や理解を、無理なく段階的に高めることができた。しかしながら、機械の操作に慣れることや、英語で話すことに慣れるためには、オンライン交流会が複数回あるとよかった。

英語学習との関連では、機械翻訳の扱いは今後さらに注意が必要になるだろう。今回は、機械翻訳を使いだすと児童が自分で考えなくなることを危惧して、全面的に使用を否定して学習を進めた。英語を使ってコミュニケーションをとる力を高めたいという教師の説明や、ビデオの聞き取りやオンライン交流会において機械翻訳では対応できない状況を経験したため、児童

は機械翻訳を使わないことに納得していた。しかし現実には手軽に使える便利な道具であり、交流が深まるにつれ、小学校の授業で学習する言語材料だけでは表現しきれない事柄を伝えたい場合も生じ、機械ではないが教師が表現方法を伝えることはあった。近年は機械翻訳の質が著しく向上しており、今後さらに身近なものになるだろう。言語習得にとっては機械翻訳の利用に否定的でも、同時に国際交流の機会であることを鑑みれば、バランスをとりながら発達段階に応じた機械翻訳の利用方法を考えていく必要があるかもしれない。

交流グループについては、少人数で交流することで親しくなりやすいだろうと考えてグループ同士をペアリングしたが、ビデオメッセージはすべて見ており、同じ子供同士が交流を続けたという意識は児童には見られなかった。グループのペアリングはオンライン交流会でのブレイクアウトルーム以外では機能しなかったといえる。結果としては、すべてのビデオを十分に見ており、児童はかなりスラバヤの子供たちの名前を覚えていたので、はじめからペア・グループに固執する必要はなかったかもしれない。

そして、子供たちがお互いに仲良くなることを大切にすると、リアルタイムでのオンライン交流会の話題は、好きな色や動物、食べ物、スポーツなど、もっと子供たち自身のパーソナルなことを話してもよかったと思う。

7. おわりに

本稿では、金沢とスラバヤの小学生によるオンラインでの国際交流学習のプロセスを整理し、成果と課題を考察した。オンライン化が急激に進み、一人一台のICT端末が揃った教育現場だからこそ実現した教育実践であった。子供たちにとって遠く離れた国に、確かに同世代の子供たちがいると実感でき、異文化理解や英語学習の機会になっていた。

今後、ICT環境はますます進展し、国内外との交流活動は広がっていくと思われる。様々な

試行錯誤を通して、よりよい国際交流学習を実施していきたい。

引用・参考文献

- 井上桃子・山本長紀 (2014) 児童が求める国際交流—日本・オーストラリア間の交流授業の実践報告—、小学校英語教育学会誌、14巻01号、50-65頁。
- 木村明憲・黒上晴夫・谷口生歩 (2020) 小学校でのタブレット PC を活用した国際交流による資質・能力の変容、教育メディア研究、26巻2号、1-17頁。
- 林寛平 (2021) 【在宅留学】ウブサラ大学とのオンライン共修、信州大学比較教育学研究室、http://shinshuedu.blogspot.com/2021/03/blog-post_24.html (2022年3月15日確認)
- 文部科学省 (2020) 令和元年度「英語教育実施状況調査」の結果について、https://www.mext.go.jp/content/20200715_mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf (2022年3月15日確認)
- 山本淳子 (2011) 小学校英語教育における国際交流の役割と意義、新潟経営大学紀要、17巻、103-116頁。